

令和2年度第1回 千葉市史跡保存整備委員会 加曽利貝塚調査研究部会 議事録

1 日 時 令和3年3月8日（月） 午前10時00分～12時00分

2 場 所 千葉市教育委員会 第二会議室（Zoomにて開催）

3 出席者 （委員）

高橋部会長、谷口副部会長、設楽委員

（オブザーバー）

千葉県教育庁文化財課 吉野主任上席文化財主事、武田文化財主事
（事務局）

【文化財課】佐久間課長、森本主査、須賀主任主事、青笹主事

【加曽利貝塚博物館】加納館長、長原主査

【埋蔵文化財調査センター】西野所長、松田主任主事

4 議 題

報告

- （1）令和2年度調査研究事業報告
- （2）令和2年度発掘調査結果報告
- （3）史跡ガイドアプリケーションについて

議題

令和3年度以降の発掘調査計画について

5 議事の概要

報告（1）令和2年度調査研究事業報告

事務局より内容を説明。

報告（2）令和2年度発掘調査結果報告

事務局より内容を説明。

報告（3）史跡ガイドアプリケーションについて

事務局より内容を説明。

議題 令和3年度以降の発掘調査計画について

事務局より内容を説明。来年度の発掘調査範囲について、調査区を拡張するよう意見があった。来年度以降の発掘調査範囲について、貝層部分を入れた計画を立てるよう意見があった。

6 会議経過

【開会】

(事務局)

それでは、ただいまより、令和2年度第1回千葉市史跡保存整備委員会加曽利貝塚調査研究部会を開催いたします。

議事に入ります前に、本日の会議についてご説明いたします。本委員会は本市の情報公開条例に基づき、公開といたします。傍聴人の方はお手元にお配りした傍聴要領をご確認の上、お守りいただきますよう、お願い申し上げます。今は傍聴人の方はまだいらしていません。

本日の会議につきましては、オンラインにて行い、委員全員のご出席をいただいておりますので、千葉市史跡保存整備委員会設置条例第5条第2項により、会議は成立しておりますことをご報告申し上げます。議事録は事務局が作成し、部会長の承認によって確定いたします。

なお、本日はオブザーバーとして、千葉県教育委員会文化財課より、主任上席文化財主事 吉野様に御出席いただいております。

それでは、これより会議に移らせていただきます。ここからは、高橋部会長に進行をお願いします。

高橋部会長、よろしくお願いいたします。

(高橋部会長)

本日は報告事項・協議事項がいくつかありますが、それでは「報告事項1 令和2年度調査研究事業報告」について、事務局からご説明をお願いいたします。

【報告事項1 令和2年度調査研究事業報告】

〔事務局説明：資料1 令和2年度調査研究事業報告について説明。〕

(高橋部会長)

ただいまのご報告に対して、ご質問やご意見はありませんか。特にないようですので、何かありましたら会議の途中でも構いませんので、ご意見をいただければと思います。

引き続き報告事項の2、「令和2年度発掘調査結果報告」につきまして、ご説明をお願いいたします。

【報告事項2 令和2年度発掘調査結果報告】

〔事務局説明：資料2 令和2年度発掘調査結果報告について説明。〕

(高橋部会長)

それではただ今の説明に関しまして、ご質問あるいはご意見ございますか。

(谷口副部長)

2点お伺いしたいんですけども、16次調査で、旧Iトレンチでしょうか、「中央部は遺構が希薄で段差をもって窪んでいる」というご説明がありましたが、その「段差」というのはどういうものなのか、階段のように掘り窪められてるってということなんですか。それが1点です。

もう1点は、やはりその旧Iトレンチで、65号住居跡について。縄文時代中期後葉の住居跡であることを再確認されたのは重要だと思いますが、そうするとこの南貝塚の貝層に近いところの下部に中期の集落跡がある程度広がっているという風に考えられてくるのでしょうか。そこは加曽利貝塚の遺跡形成過程を考える上でも大事な点だと思いますので、所見をお伺いしたいと思います。

(松田主任主事)

まず1点目ですが、資料の2-3図をご覧くださいと、北から南になだらかに下っていくんですけども、この65号竪穴住居跡の辺りでは一回フラットな面があり、65号住居跡の少し南側になると、もう一回、今度ガクッと段差をもって下がっていく。

つまり、一つながりでなだらかに下がるのではなく、一回65号住居跡付近で平らなテラスを生じて、そして下がっていくことを「段差」と表現しました。

それから2点目の、中期の集落が南貝塚の貝層の下にあるかないかということについてです。

今回、中期の住居跡である65号住居跡を確認いたしました。また、昨年まで行っていた縄文時代の晩期の調査においても、貝層の下から中期の住居を1軒確認していますし、貝層の無い晩期の包含層の下でも浅く削平されてしまった中期の住居跡を確認しています。少なくとも2年間の調査で3か所、中期の住居跡を確認していますので、おそらく南貝塚の下には北貝塚ほど濃密ではないにしろ、中期の住居が散漫な形で分布していて集落が存在していたと考えております。いかがでしょうか。

(谷口副部長)

段差の説明ですが、明らかに人為的に段差をもって掘り窪めてるってような所見ではないのでしょうか。つまり、どの深さまで掘削してるのか、断面図がないのでよくわからなかったのですが、ローム層の上面の部分が不自然に人為的に階段状になっているのか、そうでなくて段差があるように見えるという程度なのか、そこが今のご説明ではよくわからなかったです。

(松田主任主事)

はい。今のところの所見といたしましては、その段差は、テラスがはっきりしたものでありその上に縄文包含層が残っておりますので、縄文人がそこにいたときには平坦なテラスが一段あり、そしてそこから南に更に下がっていくというようなものであったと考えています。一応、縄文時代の包含層がその上にありますから、縄文人がそのところで何らかの掘削行動を行っている可能性も十分考えられると考えております。図面が

なくてわかりにくいのですけれども。

(高橋部会長)

そうですね。谷口副部会長のご質問と少し関係しますが、今の松田さんのご説明は、この中央低地の部分は、後期の遺構、低地が築かれる前に中期の集落が散漫的であるけれども住居が分布していたということと、後期の段階でこの部分を人為的に削平したという風にお考えということで間違いないですか。

(松田主任主事)

私の現時点の所見としては、そのように考えております。ただ、他の可能性を否定するためには、もっと慎重に調査を進めなければいけないと思っております。

(高橋部会長)

そうですね。一番大きな根拠になったのが、この65号住居跡が本来の立ち上がりの深さがなくて、床面だけしか残ってないことと。つまりその本来の立ち上がりの部分まで削平されているということが一つありますよね。

(松田主任主事)

そうですね。

(高橋部会長)

そのあと、この辺からさらに1mほど、深さ2mになるくらい深く掘削されている様子が確認されたということですよね。

(松田主任主事)

1mほど南に下がっている状況ですね。

(高橋部会長)

さらに1mほど下がっているということ。それで、それは決して段差ではないけれども、そこを境に少し急激に下がっていくという解釈でよろしいですか。

(松田主任主事)

そうですね。

(高橋部会長)

わかりました。谷口副部会長、今のところはよろしいですか。

(谷口副部会長)

はい。このトレンチの部分というのは改めて来年度も継続で調査するということでしょうか。

(松田主任主事)

その通りです。

(谷口副部会長)

それでしたら、今のような点は大事なポイントになると思うので、慎重に検討していただきたいと思います。

(高橋部会長)

そうですね。

逆を言えば、81号住居跡は、後期の安行1式期とのことですが、この立ち上がりは普通の竪穴住居跡と同じくらいの深さだったのでしょうか。それともやはり、かなり上が飛ばされている状態なんではないでしょうか。

(松田主任主事)

今、深さについて正確に何cmと申し上げられませんが、おそらく40cmぐらいあったと思いますので、中期の65号住居跡ほどは浅くはなっておりません。

(高橋部会長)

それを確認したかったんです。つまり、後期の安行1式以前の段階で削平されているという事実がとても大事になってくると思うので、決して歴史時代になって削られたわけではないということですよね。はい、わかりました。

それと溝状遺構の件ですが、幅1mほどで、大形住居跡の方へ続いていきそうなのですが、この溝は大形住居跡との関連はいかがですか。

(松田主任主事)

去年まで調査したところにおいては、大形住居跡が埋没した後で掘られた溝です。ですから大形住居跡よりも新しい溝になります。

(高橋部会長)

あの大形住居跡は確か安行3b式くらいだったと思うので、これよりも新しいということで、どれほど新しいかについてはまだわかってないということよろしいでしょうか。

(松田主任主事)

そうですね。整理作業においても、溝状遺構からどういう遺物が出ているかについて調べており、明瞭な前浦式などがあればいいのですが、そういうものが確認できていないのです。溝状遺構の場合は遺物が少ないので、ちょっとまだ時期が限定できておりません。

(高橋部会長)

はい、わかりました。他にご質問ございませんか。

(設楽委員)

先ほどの段差ですが、来年度も継続調査で、それが人為であるかどうかを詰めていくと。先ほど慎重に調査していくとおっしゃいましたが、もう少し具体的に、どのような掘り方をして人為かどうか見極めるのか。どのように平面的な段差の広がりをつんでいくのか、遺物包含層の関係をどうやって見極めていくのか、そこをもう少し具体的に教えていただけますか。

(松田主任主事)

今回そのテラスがある部分は、面積的にもそれほど広くなく、なおかつ表土がぎりぎりまで及んでいるところです。ですから、その削平は人間が掘っているのか、表土がそ

ここまで及んでいるのかをしっかりと見極めないといけない。表土が及んでいたら削平になりませんので、そうではないということをしっかりと確認しなければいけない。

それからもう一つ、まだ今回、テラスの上にうすく堆積している遺物包含層を調査していないので、その時期がまだわかっていません。これが縄文時代の後期とか晩期だとかしっかりと押さえられれば、そこを縄文人が掘削しているとすれば時期が限定されてくる。その箇所で表土がそこまで及んでいないかどうか、包含層の時期はいつなのか、そういうことを確認したいと考えております。

この資料２－３では、調査区はかぎ状にいびつな形をしています。来年は長方形にまっすぐに西側を拡張して調査する予定です。そちら側でしっかりとテラスの上の土が何であるのかを確認したいと思っております。

(設楽委員)

ありがとうございました。

(高橋部会長)

これは後程の議題の来年度の調査の計画でも触れられますよね。

(松田主任主事)

そうです。

(高橋部会長)

それでは議題で詳しくお話をしていただければと思います。

他に何かございますか。

(谷口副部会長)

資料の２－３のスケールは、これは正しいのでしょうか。

(松田主任主事)

トレンチの幅は２mですので正しいと思います。

(谷口副部会長)

はい。わかりました。結構です。

(高橋部会長)

どうもありがとうございました。

続けて報告事項３、「史跡ガイドアプリケーションについて」ご説明をお願いいたします。

【報告事項３ 史跡ガイドアプリケーションについて】

〔事務局説明：資料３ 史跡ガイドアプリケーションについて説明。〕

(高橋部会長)

はい、ありがとうございました。それでは、ご質問あるいはご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

これは最近のいろいろな史跡整備の中で取り入れられている技術だと思いますが、こ

れはW i - F i 環境の影響は受けないのですか。

(森本主査)

今回はW i - F i は使わない中で提供できる形で、基本的にタブレットの中に入っているアプリケーションだけで運用するという形で考えております。G P Sで位置情報に基づいたデータを提供します。

(高橋部会長)

A Rもそうですか。

(森本主査)

はい。将来的にはW i - F i 環境の中で使える形も考えたいと思っています。

(高橋部会長)

そうですね、とにかく広いところなので、W i - F i 環境を整えるだけでも相当時間もお金もかかると思います。A Rは、例えば自分のスマホでは見れないものですか。

(森本主査)

今回はこの貸し出すタブレットの中で使ってもらうもので考えております。

(高橋部会長)

最近は自分のスマホに入れおいて現地へ来て見る手もあるようです。わかりました。これは来年度5月にはある程度形になるということですね。

(森本主査)

はい。

(高橋部会長)

これは遺跡の現状には大きな変更はないということですよね。

(森本主査)

はい。

(高橋部会長)

わかりました。委員の皆さまいかがでしょうか。これは最近のことなんで、私どうもあまりピンと来ないんですけれども。

また後でも構いませんのでご質問あるいはご意見あればお寄せいただきたいと思います。

それでは報告事項を終わりにして、協議事項に入りたいと思います。議題「令和3年度以降の発掘調査計画について」ご説明をいただきたいと思います。

【議題 令和3年度以降の発掘調査計画について】

〔事務局説明：資料4-1 令和3年度の発掘調査計画について説明。〕

(高橋部会長)

はい、わかりました。それでは今ご説明いただきましたので、ご意見あるいはご質問

いただきたいと思います。

(設楽委員)

南西に5×4mのグリッドを開けるということですが、もう少し広い範囲で現地を見た場合、地形的なことですがこの辺りは平らな状況なのでしょうか。現地表面というか。

(松田主任主事)

現地表面においては平らです。ですけれども、貝層の開口している部分がちょうどそちらの方向にあたります。ですから現地表面は平らですけれども、もしかしたら下が窪んでいる、埋没谷みたいなものがあるかもしれません。

(設楽委員)

そうすると、もう少し広い範囲で地形がどうなっているかというのが問題になると思います。その場合に西側に住宅街が広がっていますが、その発掘調査は過去にされていないのでしょうか。

(松田主任主事)

西側で過去に確認調査等が行われていますが、遺構は確認されておりません。そのときの記録を見て埋没谷があるかどうかは、現在その記録からは読み取れません。

(設楽委員)

そうですか、わかりました。

(高橋部会長)

この発掘グリッド、低位ローム層の確認ということですが、これよりもさらに北側の部分は、貝層は外れているからこの辺も結構低いですよ。

今計画されてる南西部の確認トレンチは、確か私の記憶では低いのですが、それよりも北側の大きなグリッドがありますが、ここでいうと第何区になるのか、この辺もかなり低くなっていないですか。

(松田主任主事)

貝塚の貝層の部分は高まっていますから、それに比べれば低くなっています。

(高橋部会長)

そうですね。これで多分、貝層の裾野を一応水平面と見立てて西側を見てくると、とりあえず平坦面のように見えるんですけども、何か全体が凸凹していますが、少し低いですよ。

(松田主任主事)

そうですね。

(高橋部会長)

設楽委員がおっしゃったように地形測量の図のようなものはないのでしょうか。

(松田主任主事)

ここは全面的に、何年か前に測量しております。

(高橋部会長)

そのときの図で凹凸というか谷間は見えなかったですか。

(松田主任主事)

まだ明瞭な谷は見つけていませんがもう一回確認したいと思います。

(高橋部会長)

そうですね。ぜひお願いいたします。それ以外にいかがでしょうか。

(谷口副部会長)

先ほどローム層の中央部分の削平状況を考える一つの視点として、ローム層の調査をされると説明があって、それはよろしいと思うんですけども、その中でA T層準が比較的上の方に既に露出しているのではないかという見通しを示されました。それは当然そのA Tの分析をされていくと思いますが、そういった自然科学的な分析は、どのように計画されているのか、説明が具体的になかったと思います。どこをどういう発掘するか説明はわかりましたが、それに伴って調べたいことを、どう分析手法を応用してやっていこうとしているのか、少しわかりませんでしたので、補足していただけないか。

(松田主任主事)

旧 I トレンチの中にマス掘りを設定しまして、第 1 4 次調査のときもそうだったのですが、関東第四紀研究会の方にご協力いただくことを予定しています。都留文科大学の元教授の上杉先生ですとか、市原市の近藤さんですとか。火山灰の方は他にも何人かいらっしゃるのですが、そういう方々に来ていただいて、複数の目でローム層の線引きを行って対比しております。マス掘りをしたらその場で来ていただいて、まずは肉眼で見て、どういう風な層であるかというようなことを見るため分層します。その後、A Tがあるところに当然かかるようにして柱状サンプルを採りたいと思っております。今度その柱状サンプルを採ったあと、火山灰の分析、具体的には鉍物や火山ガラスの分析になります。晩期の調査においては、埼玉の第四紀文献センターの町田瑞男氏にお願いして、鉍物分析を行って、A Tかどうかを確認しております。来年度以降は、関東第四紀研究会の方にご紹介いただきながら分析する方を早めに決めて、現地に来ていただいてサンプリングを含めてやっていただきたいと思いますと思っております。

(谷口副部会長)

ローム層の話は今説明ありましたが、それ以外の遺物包含層の土壌学的な分析などについては何か考えられてないんですか。

(松田主任主事)

遺物包含層の土壌学的な分析は、現在、土壌をやっている東京自然史研究機構の細野衛氏にやっていただいて、土壌分析や植物珪酸体も調べたのですが、現在、1 6 次調査については予定しておりません。

(高橋部会長)

得られるデータはやはり貴重なので、今考えられる範囲の技術的な分析で考えられるものならいろいろな手を考えてみてください。

(松田主任主事)

どのような分析ができるかも、自然科学の方々にご意見いただきながら進めてみたいとは思っております。

(高橋部会長)

千葉県はA Tが比較的浅いところで出ます。低いところへ向かって1 mさらに傾斜がある状況を考えると、もしそれが人為的な削平とすれば、A Tまで及んでいる可能性もあるわけです。その辺は要注意ですね。私の方からよろしいですか。

(松田主任主事)

はい。

(高橋部会長)

早稲田大学の調査で、去年初めて南貝塚の中央低地と貝層の間をかなり重ねるようにレーダー探査を行いました。資料1-2の図の10に、南貝塚の貝層の状態、あるいはレーダーの結果が出ているんですが、ご覧の通り今年令和2年度の調査区のちょうど外側、地図で言うと西側に小山のような貝層が連なった、それから低地部になるところに地中にこのように赤と黄色のかなり濃密な遺構分布と私どもは今考えているんだけど、これが見えてるんですよ。

これが地点貝層のようなものが遺構の上にあるのか、貝層はないけれど遺構があるとすれば中央低地に何かあるというサジェスションになります。レーダー探査で私どもも気になったのは、中央低地でまっさらな場所というよりは、掘立柱みたいな建物があつたらどうなんだろうかということも実は考えています。発掘してみなければわかりませんが。ただ令和3年度の発掘区の中にはこれは入らないですよ。

(松田主任主事)

今おっしゃっているところは令和3年度の調査区で西側辺りに少し入るか入らないかという感じだと思います。

(高橋部会長)

もう少し拡張できないでしょうか。

(松田主任主事)

1~2 mくらい西側にさらに拡張するのはできなくはないですけども。

(高橋部会長)

これから長期的な見方の調査範囲が示されると思いますが、令和3年度の調査区が中央低地を判断する上での非常に重要なトレンチだということがよくわかるんです。そのトレンチなのに、先ほど申し上げたレーダー探査の結果が確認できないような形になっています。逆に言えば、今の調査区だけで中央低地を判断していいのかという問題が出てきます。なので、もう2 m方、西側へ少し拡大できる計画にしてもらえませんか。

(松田主任主事)

もう一回考えてみたいと思います。私もそのすれすれか、かかるかどうかという風

に考えておりましたので。

(高橋部会長)

はい。後期の住居跡などはレーダー探査でも見事に赤く反応が出ています。なので、遺構があればたぶん反応が出る。なので、西側に発掘の調査区を2 m拡張して、レーダー探査で黄色や赤く反応が出ているところがやはり遺構だったってことになれば、中央低地の性格を判断する上でとても重要な資料を得ることになるので、ぜひそこまで含めて検討してください。

(松田主任主事)

はい、わかりました。

(高橋部会長)

はい。委員の皆さまよろしいでしょうか。

(谷口副部会長)

今の地中レーダー探査の図を見て非常に興味深いのは、今高橋部会長がおっしゃったことと同じですが、中央窪地を取り囲むようにずっと弧状に赤い部分が連なっているように見えます。

これは、中期の場合だと私が環状集落の地域性を論じたときに、「下総型」と言ったパターンで、竪穴住居が密集する部分の内側に土坑が集中するような空間構成が下総で非常に顕著です。そういったものと非常に類似してるように表面上は見えます。これは中期のものと時期が違うでしょうから、それと直接関連があるかどうかわかりませんが、何か規則的な空間構成が、このレーダー探査で引っかかって見えてきてるんじゃないかという感じもします。だから、そこはもう少し戦略的にそれを調べられる掘り方へ、今からだったらまだ修正可能だと思うので、もう少し戦略的に考えられたらどうでしょうか。

(高橋部会長)

はい。賛成です。

(松田主任主事)

調査期間のこともありますが、西側に少し拡張することは考えてみたいと思います。2 m拡張できるかどうかですね。

(高橋部会長)

そうですね。私が気にしているのは、もしローム層まで削平されているとすれば、ちょっとした竪穴住居跡みたいなものだったら簡単に無くなってされてしまいますが、これだけけっこう赤いところが円周をなすように見えるということは、かなり深いというイメージがあるんですよ。例えば今、谷口副部会長もおっしゃったように、環状集落の内側へ周る深い土坑なども十分にありえます。で、もう一つの可能性は、削平した後の遺構の可能性はあるわけです。これだとやはり両方とも明確に見えるので、この遺構があるだろうということはまず間違いありません。問題は、いったいどういう遺構なのか。

中央低地といって完全にまっさらだったのか。あるいはそれ以前のものが残ったのか。あるいは、中央低地がつくられた後の遺構があるのか。これははっきり見極めないと、非常に重要な視点なので。ぜひそれ検討してください。

(松田主任主事)

はい、わかりました。

(高橋部会長)

はい、よろしいでしょうか。それでは、令和3年度以降の、長期的な視点に立った調査計画についてお話をお願いいたします。

【議題 令和3年度以降の発掘調査計画について】

〔事務局説明：資料4－2 今後の発掘調査計画について説明。〕

(高橋部会長)

はい、どうもありがとうございました。委員の皆さまいかがでしょうか。

(谷口副部会長)

少し意見を言ってもよろしいでしょうか。

(高橋部会長)

はい、どうぞ。

(谷口副部会長)

発掘調査を大きく2つに分けていて、加曽利貝塚の解明のための調査と、整備に伴って行う調査ということで。これを分けていくのは当然だと思いますが、報告書となると、例えば14次調査の報告書、15次調査、16次調査と、調査次ごとの報告書になってしまって、その区別が、二つの性質の違う、いわば学術調査の部分と、事前調査の部分と。それが報告書という形になると、違いがわかりにくくなるのではないかと思います。

学術調査は研究のためのものだから、研究調査報告書という位置づけにすることもやっていいと思うんですが。どうなんでしょう、発掘調査の届出も違うのではないですか。学術調査としての届出と事前調査としての届出と、違ってると思うんですけども。その報告書もそれに合わせて、加曽利貝塚の研究という形での報告と、それからその立会等含めた事前調査の報告と、はっきり分けるという考え方はできないでしょうか。

(松田主任主事)

今、申し上げましたのは、これは刊行年を示しているものです。報告書の位置付けまでは述べたものではありませんので、谷口先生の言われるような位置付けを考えるのは、できると思っております。今までの発掘の14・16次と15次についてですが、これは全部、特別史跡の中の調査ですので、現状変更を提出しているのですが、予算上、14次と16次は国庫補助をもらっているものですが、15次は千葉市の単費でやっているものですので、これは一緒の報告には当然なりうるものではありません。当然報告書は分けなければいけません。それは当然としまして、さらに刊行される報告書の一方を

研究報告、もう片方は整備に伴う報告ということで、位置付けて、名前をつけて出すということは可能だとは思いますが、同時に忘れてはいけないのは、15次調査として調査したものも、南貝塚全体において50か所から60か所調査していますので、そこから得られた情報というのも、決して少ないものではないのです。これが単なる行政的な報告だけで終わってしまっては当然いけませんので、何らかの形で報告は出さなければいけない、誰でも見られる形で報告をしなければいけないと思っております。ただそれが、研究報告とするのか、そうではない名前の報告とするのかというのは、まだ議論の余地はあるかと思えます。

(谷口副部長)

私が言ったのは、15次調査で得られた知見に全然学術的な価値がないということを言ってるわけではないので、それは誤解のないようにお願いします。学術調査はやはりQ&Aがはっきりしていないといけない。問題設定、課題設定があって、それに対してこういう調査方法がとられてその結果こうだったという結論が示される、Q&Aがちゃんと対応するものになっていないと、学術調査にならないですね。

15次調査の場合も、できるだけそれに沿わせた形でやりますが、観覧施設の整備など整備のための調査になるので、地点そのものが元々そういう風にしか選定できないので、そこにはやはり質的な差があると思います。それはこの部会で検討することなのか、もう一つ上の委員会で決めることなのか、今ははっきりしませんが、そこが曖昧にならないようにすべきではないかというのが私の意見です。

(高橋部会長)

はい。これ、どうなんですか。

(松田主任主事)

報告書の扱いや、どういう名称にしていくとかは、まだ内部でも議論しておりません。今回このような提示がありましたから、考えていきたいと思っております。

(高橋部会長)

そうですね、ぜひ検討してみてください。

中長期の計画ですが、資料の4-4を見ると舟着場や低地部まで含めた大掛かりな調査といたしますか、私は当然こういった周辺環境に調査のメスを延ばすのは大賛成です。いずれはやらなければいけない。ある程度長期的な視点を持つために、あらかじめこの10年の間に、必要な箇所に調査のメスを入れていくその方針に私は賛成です。だからこれは体系的にはいいと思うんです。

ただ一つ気になるのは、南貝塚の方です。実は周囲をマウンドのように取り囲む、この南貝塚の貝層部分に全然メスが入っていないことに私は一抹の不安を覚えます。なぜかというと、例の貝層断面観覧施設というのがあって、見事なトンネル工法によって貝層が見れるようになっていますが、このトレンチそのものは、昔の後期貝塚の概念で作ったものであって、中期の北貝塚の貝層と同じような視点で、南の地膨れを捉えていま

す。ところが最近は、そういう解釈ではなくなっていますよね。博物館の高梨前館長もこの間の論文で書かれたように、南貝塚と、中期の北貝塚で全然違うんだよという視点で、やはり見ていく必要があろうかと思います。その場合、貝層断面観覧施設の部分だけではなくて、十数か所ある高まりのどれか一つを選んで、調査のメスを入れていく必要があるのではないかと私は思いますがいかがでしょう。

(松田主任主事)

私もその必要性は認識しております。今、この段階でお答えできないので、こちらでも考えたいと思います。

(高橋部会長)

そうですね。3月16日に予定されている史跡整備保存整備委員会の中では、今日決められたものが出るわけですね。

(松田主任主事)

はい。

(高橋部会長)

そのときに、やはり長期的な展望で委員の皆さまにご議論いただくことになると思いますので、今私が申し上げたようなことも含めて、検討した結果を入れていただきたいと思います。北貝塚と南貝塚という二つの相異なる、場合によっては全く性格の異なる貝塚を私たちは同時に相手にしているので、二つが同じような扱いではやはりまずいだろうと思いますので、今申し上げたようなことを検討していただけるでしょうか。

(松田主任主事)

はい、わかりました。私が今回この資料をもう一回ご提示いたしましたのは、低地を将来調査していくのですが、それについての試掘をそろそろ準備しなければいけないので、それについて説明するのが、今回私の方で用意したものでした。それ以外につきましては、今回ご意見いただきましたので、こちらで持ち帰って考えてから再度提案したいと思います。

(高橋部会長)

そうですね。委員の皆さまも、低地まで含めて検討をしている方針に特段異論はないと思います。むしろ賛成されると思いますので、そういった細かな今後の調査、それこそ長いスパンで調査を継続していくための基礎的な資料を得るのに、この10年を使うというこの視点は、私は決して間違いじゃないし、ぜひ必要な準備だと思います。

それでその中に今後の貝塚のことまで含めた、何を究明するのかといった視点を盛り込んだ調査方針をぜひ確立していったほしいと思っています。他にいかがでしょうか。

(設楽委員)

今の高橋部会長のまとめに大賛成です。それを踏まえて、再来年度の2022年度からいよいよ坂月川に調査が入っていくことになりますが、そうするとやはり環境史ですよね。これは大きなポイントになってくるわけで、そのための花粉分析だとか様々な分

析をやっていく必要があるわけですね。そのための方針というか戦略というのをしっかりと立てていく必要がある。先ほど谷口副部長からもありましたように、火山灰分析あるいは土壌分析も、松田さんがコーディネートされてどなたに依頼しようかということをやっていますけれども、やはりそこは環境史専門の人が中心になって、コーディネートから始めて、戦略を立てて方針を固めてやっていくということを進めていかなければいけないと思います。それが試掘の段階からできているのが望ましいと思うんです。だからそれは全て新しい博物館の組織の体制と関わってくる問題だと思うんですけどね。ですので、これは親委員会の方の議論になるかと思いますが、ぜひ今度の議論でも、来年度以降の取っ掛かりを提示していかれたらよろしいのではないかという風に思いますので、一言申し上げさせていただきました。

(高橋部長)

はい、ありがとうございました。谷口副部長、いかがですか。

(谷口副部長)

高橋部長、設楽委員がおっしゃったことと全く同感です。よろしくお願いします。

(高橋部長)

はい、ありがとうございました。委員3人意見が一致しております。試掘といってもそこからすでに真剣勝負が始まっているということです。試掘をやった次の段階で考えましょうではなく、もうその段階から大事な仕事が始まっているんだという認識で、もちろんそういう風に考えてらっしゃると思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

他に何かございませんでしょうか。それでは、ひと通り審議を終えたと思いますが、事務局の方から何かありますか。

(事務局)

ありません。

(高橋部長)

それでは委員の皆さまありがとうございました。それでは事務局の方にお渡しします。

(事務局)

委員の皆様、本日はお忙しい中、ご審議いただきありがとうございました。以上を持ちまして、令和2年度第1回千葉市史跡保存整備委員会 加曽利貝塚調査研究部会を閉会いたします。ありがとうございました。

——了——